

## 第2回 岡崎地域活性化ビジョン検討委員会 摘 録

日 時：平成22年8月18日（水）午後2時から午後4時30分

会 場：京都市国際交流会館 特別会議室

出席委員（敬称略）

委員長

もんない てるゆき  
門内 輝行

京都大学大学院工学研究科教授

副委員長

たかぎ ひさかず  
高木 壽一

岡崎地域活性化懇談会座長

委員

（五十音順）

うえむら のりこ  
上村 憲子

市民公募委員

おおしま さちこ  
大島 祥子

一級建築士・技術士(建設部門)、スーク創生事務所代表

おおた せつこ  
太田 節子

神宮道商店街組合会長

かしはら やすお  
柏原 康夫

(株)京都銀行会長、京都商工会議所副会頭、(社)京都市観光協会会長

こばやし かおり  
小林 香

シヨウクリエイター、「第26回国民文化祭・京都2011」開閉会式 脚本・演出担当

なかじま せつこ  
中嶋 節子

京都大学大学院人間・環境学研究科准教授

なかにし かずや  
中西 一彌

市民公募委員

にしむら たかし  
西村 隆

京都市総合企画局長

はまさき かなこ  
濱崎 加奈子

伝統文化プロデュース連REN代表

ふじい ようこ  
藤井 容子

京都市未来まちづくり100人委員会(岡崎ホールディングス)、ライター

ほんだ かずお  
本多 和夫

平安神宮禰宜

みなみ たかあき  
南 隆明

京都商工会議所観光産業特別委員会委員長、京都駅ビル開発(株)相談役

むらい やすひこ  
村井 康彦

京都市美術館長

以上15名

### 1 開会

事務局（総合企画局市民協働政策推進室プロジェクト推進第二課長 三科）

ただ今より第2回岡崎地域活性化ビジョン検討委員会を開催させていただく。委員の皆さまにおかれては御多忙の中、御出席いただき御礼申し上げる。本日の委員会は公開となっており、報道席及び一般傍聴席を設けているので御了承願いたい。

本日の議題は、第1回委員会の委員意見の整理、京都市プロジェクトチームの検討状況、ビジョン構成の骨格とビジョン検討に当たっての重要な論点、作業部会の設置である。

また、中西委員が作成に携わられた琵琶湖疏水に関する歴史探索マップを参考に配布している。それでは、ここからは門内委員長に進行をお願いしたい。

## 2 前回欠席委員の紹介・挨拶

### ○門内委員長

ここから私が進行をさせていただく。まず、前回欠席された柏原委員が出席されているので、自己紹介と、前回他の委員の皆さまにお話をいただいた「岡崎地域の10年後の将来像と実現のための方策」について御意見をいただきたい。

### ○柏原委員

前は欠席となり誠に申し訳ない。建都1100年記念事業で形作られた岡崎地域は、以前から京都の中でも大変素晴らしいゾーンだと認識している。建都1200年記念事業の際、京都コンサートホールとJR京都駅ができたが、京都コンサートホールは十分な大きさを備えることができず残念であった。文化都市京都を素晴らしい地域にするため、何とかならないかという思いが常々あり、建都1300年に向けて岡崎地域を世界の文化ゾーンにできないかという夢をあちこちで話していたら、今回の委員として声が掛かった。

岡崎地域の素晴らしさは、委員の皆さまも認識されていると思うが、何といっても疏水、東山、そして文化交流施設の集積である。この魅力的な岡崎地域を何とか世界に通じる京都の文化ゾーンにしたい。

今回のビジョンは10年計画のようだが、私は建都1300年に向けた長期スパンで計画し、5年、10年ごとに点検しながら進めていく、ということができないかと思っている。

岡崎地域は、やはり多くの人を引き付ける地域にしたい。休みの日には、京都市民をはじめ、多くの方が是非訪れたいと感じるような文化度の高い地域にするための方策を、専門家の方々の意見を聞きながら議論していきたい。

他都市では、例えば東京の上野公園には、素晴らしい美術館、大きなコンサートホールがあり、全体としても雰囲気のある森が形成されている。また、外国ではフランスのシャンゼリゼ通りのように、いつでも多くの人で賑わっている魅力ある公園のような大通りがある。岡崎地域では、平安神宮の応天門から大鳥居までの神宮道通りを、みんなが憩えるような空間にできないだろうか。実は岡崎地域を訪れると、いつも困るのだが、美術館に来て帰りに食事をするところがない。美術館や図書館を訪れた後、あるいは疏水を散策した後においしい食事ができるような憩いの場所ができたらと思う。

私の知識だけでは、全体をプランニングすることはできないので、是非、この検討委員会の場で、あるいは検討委員会外からも、建都1300年に向けて岡崎地域にどのような夢を描けるかという提案を求めていくことも一つの方策ではないかと考えている。

夢のような話をしても実現するお金はどこにもない、常々、そうした話になるが、お金は天下の回りものであり、何とかなるだろうと、強引ではあるがそんな思いを持っている。

私が生きているかどうか分からない将来のことではあるが、岡崎地域を世界に通じるような素晴らしい地域にできないだろうかとの夢を持って、このプロジェクトに参加させていただいた。

### ○門内委員長

貴重な御意見を賜り、御礼申し上げます。1000年という長期スパンでお話いただいた。1980年代に開催されていた比叡会議での京都についての議論を思い出していた。是非、世界に通じるような文化ゾーンという方向でも議論していきたいと思う。

### 3 議題

#### ○門内委員長

それでは、議題1、議題2、議題3について事務局から説明していただき、その後でまとめて議論させていただきたい。

- (1) 第1回委員会の委員意見の整理
- (2) 京都市プロジェクトチームの検討状況
- (3) ビジョン構成の骨格とビジョン検討に当たっての重要な論点

——（説明 事務局 総合企画局市民協働政策推進室岡崎地域活性化担当部長 奥）——

#### ○門内委員長

ただいまの議題について意見交換を行っていききたい。

事務局から説明のあった資料3にビジョン構成の骨格案と検討に当たっての重要な論点が提示されている。第2回委員会以降、作業部会での検討に入り、第3回委員会は12月上旬を予定している。作業部会での検討途中でも、皆さまから御意見を伺う機会は、当然入れていくようにしたいが、作業部会へと引き継ぐための意見・論点を可能な限りこの場を出して整理しておきたい、ということが本日の委員会のポイントである。まずは、この論点について御意見をいただいた後、ビジョンの構成や、他の事項についても御意見をいただきたい。

ビジョンの検討に当たっての論点を5つ挙げている。1点目は「将来ビジョンでは何を指すのか」という点である。事務局からは「水と緑とハレ舞台」というコンセプト案が出されているが、もう少し議論の枠を広げても構わないので、将来、何を指すのかという論点について御議論いただきたい。2点目は「岡崎地域の機能、役割はどうあるべきか」。これは岡崎地域にどのような機能が必要なのかという議論と、京都全体の中で岡崎地域がどのような役割を果たすのかという議論がある。それから、1点目、2点目とも関連が深い、目指すべき方向、役割の中で「岡崎地域にふさわしい賑わい施設」はどのようなものか、という議論が3点目である。

4点目は「エリアマネジメント、地域プロデュースの仕組み」についてである。前回、橋爪委員からも地域プロデュースという概念が出されていた。最近「エリアマネジメント」という概念が随分議論になっている。先ほど、国の「総合特区制度」活用が話題が出ていたが、世界中で、こうした特別なエリア、地域全体を牽引するようなエリアをどのように創っていくかということが重要なテーマとなっている。エリアマネジメントや地域プロデュースという仕組み、また、その中でプライベート（民間）セクターとパブリック（公共）セクターがどのように連携を図っていくかという仕組みに関する議論が4点目である。

以上の4つの論点に含まれない点は、5点目の「その他」として、議論させていただきたい。また、本日欠席のお二人の委員（橋爪委員、森本委員）からのご意見・ご提案も出されているので、後ほど御紹介したい。

では、まず、本日お配りいただいた資料の説明も兼ねて中西委員から御意見いただきたい。

#### ○中西委員

配布した冊子は、私が所属している「近代京都の礎を観る会」が「京都市ニューツーリズム創出事業」の認定を受け、今年3月に発行した資料である。同会は今から8年前に、ちょ

うど、この部屋で発足会をした。非常に懐かしく、また8年が経ち、こうした具体的な議論ができるようになり、非常にうれしく思っている。

京都市内の小学校では児童を対象に琵琶湖疏水の見学会をすると聞いている。実際の見学会に立ち会ってみると、説明が十分でない先生方も多かった。この冊子発行の動機も、学校の先生が京都の重要な近代化遺産である琵琶湖疏水を生徒にきちんと説明できるように、先生方の教科書としてまとめたい、というものであった。

興味のある方は是非冊子を見ていただくとして、琵琶湖疏水を考えるに際し、重要な点を指摘したい。琵琶湖疏水において「蹴上」というところは非常に大事なところである。ここ蹴上から疏水の流れが始まり、京都市内で様々に分かれ、最終的には大阪湾へ流れていく。蹴上は、琵琶湖疏水の心臓部である。市内を様々につないでいる水路の入り口が岡崎にある。岡崎地域で疏水を考える場合、まず、蹴上という場所をもう少し取り上げる必要がある。

### ○濱崎委員

「将来ビジョンでは何を指すか」ということだが、世界中から人が集まるにはどうすればよいか、ということを考えている。京都が世界に誇れるものは何かと考えると、やはり、文化・芸術である。現在も世界中からたくさんの方が京都に来ているが、何を来ているか。文化、芸術、伝統の持つ奥行き、人の持つ技術、そしてデザインである。先日、開催された京都創生シンポジウムでも話題になったが、実は京都自身がそうしたポテンシャルの高さに気づいていない。あるいは逆に、世界の中で都市として既に充分、知名度があると勘違いしているのではないかという意見もあった。いずれにせよ、ポテンシャルは高いのだから、戦略次第ではもっと打って出られるのに惜しい、というところが現状である。では、岡崎地域を打ち出していくのに、どのような施設・機能が必要か。多くの人を引き付けている例では、例えば、世界的にはパリのルーブル美術館、国内では瀬戸内芸術祭が開催されている直島などがある。ルーブル美術館があるからパリに行く、というような強い牽引力を持つ美術館である。あるいは、美術館とホテルが一体となり、強い牽引力を持つ施設となっている。

では、岡崎ではどうすればよいか。前回も申し上げたが、やはり岡崎グラウンドの在り方の再考が必要だと思っている。例えば、世界に誇る京都の文化、日本の文化を発信する「日本文化館」のような施設の整備はいかがか。現代の日本の文化・技術も包括したような発信を行うという意味で「現代日本館」でもよいが、そうした情報を岡崎から発信していく。日本の現代アートは極めて高く評価されているのに、日本人は自覚していないし、常設している美術館もない。そうした、現代アートから、伝統文化を含め、持っているコンテンツを上手に国際的に発信し、海外から人を導いてくる、そうした機能を持った施設を創るべきである。

### ○上村委員

今、「現代日本館」を新しく創るという話が出たが、既に岡崎地域には、武道の拠点である武徳殿があり、市民狂言も見られる観世会館があり、細見美術館には茶室もある。こうした既存の施設・機能を組み合わせれば、十分に人を引き付けることはできるのではないか。

前回、岡崎の知名度が低いから「岡崎の日」を設けようとの話があった。まずは、今ある資源を有効活用し、歩行者天国化などの新たな取組を通じ、岡崎地域に行けば1日楽しめる、そうした地域イメージを打ち出していくことが大切ではないか。

先ほどの資料では、街路の整備イメージで海外の例が出されていたが、もっと京都ならではのイメージ、文化・芸術を打ち出すべきである。

## ○大島委員

ビジョンとして考えた場合、尖がるくらい徹底して地域個性を強く出すか、あるいは、色々な方が訪れるよう受け皿の広い幅広いテーマにするか、という2つの考え方がある。私は、橋爪委員が書かれている「ブランド化」という視点で考えることに大いに賛成であり、ブランド化という視点からは、地域の個性を徹底的に強めていくことが、岡崎地域の魅力につながると考えている。マンガミュージアムが好評だが、徹底してマンガにこだわったからあれだけ世界から多くの方が訪れる場所となっている。

岡崎地域の特徴は、濱崎委員も言われたように、「文化」、「芸術」、加えて京都として「環境・エコ」、更には最近の動物園の活発な展開を見ていると「学び」というキーワードもある。

各施設の現状から判断すると、岡崎グラウンドは地域の中で大きい面積を占めている割に、特定の人のみが使う施設であり、もう少し活用の余地があると感じている。

将来ビジョンとしてどのような方向を目指すかというとき、尖るほど徹底的に個性を出していくのか、幅広く様々な方が来るような地域としてやっていくのかという点については、議論が必要である。その中に岡崎スタイルというものを、いかに具体的に盛り込んでいくか考えていけばよい。

ビジョンを創った後には、マネジメントが重要になる。人の流れや、消費行動をいかにデザインしていくかが大事である。やはり人は、感動体験ができると、そこで思い出を買いたいという消費行動につながる。単にモノを売るだけではなくて、いかに感動体験ができるのか、より良い学びができるのかというシナリオをデザインしないといけない。

少々悩ましいのが、これも文化の一環だと思うが、京都人気質として「宣伝をはしたない」と思うところである。みやこめっせの地階を始め岡崎地域にもたくさん良いものがあるが、なかなかその宣伝がされていない。宣伝、プロモーションというマネジメントの面では、「よそ者」や「若者」という人たちとタグを組んでマネジメントしていくことが大事である。

## ○門内委員長

繰り返し「文化・芸術」が話題になっている。新たな施設を整備したり、今ある機能をつないだり、組み合わせたりして、文化・芸術というテーマをどのような方向で深めていったらよいか。今日は、是非そうした論点についても議論を深めていただきたい。

## ○小林委員

濱崎委員、上村委員お二人の御意見に共鳴した。確かに京都で人を呼ぶためには文化、芸術が基盤になるのではないかと思うが、世界から人を集める前に、まず、京都の人、もしくは関西の人を岡崎地域に呼ぶ方策を考えた方が良いのではないか。そのためにどうしたらよいか。確かに、伝統文化という方法もあるだろうし、先ほど上村委員の指摘のように、そうした場所は、既に岡崎地域には十分にある。ただ、施設や情報が点在、散乱していて、どこに行けば見られるのかが分かりにくく、なかなか人を引き寄せるほどの牽引力のある魅力になっていないのが現実である。

実際に岡崎地域に人を呼び込むためには、やはり前回、村井委員も指摘されていたが、京都公会館再整備が鍵になるのではないかと考えている。そこでは、伝統文化に特化するより、むしろ現在の文化、出し物を見せることによって、京都に住んでいる人、関西に住んでいる人を呼び込み、それをきっかけとして、伝統文化やその他の地域資源も豊富にあるという宣伝を同時

にしていく方が、実際的ではないか。

先ほど東京のイメージをまとう必要はないという意見があった。私は、今、東京で仕事をしているが、建物や道路などのハードに東京のイメージをまとう必要は全くないが、施設の中の技術や演出ノウハウなど、ソフトの部分は一流レベルを揃える必要がある。これは、東京、大阪など一流のところから借りてくれば良い。たくさんの人を引き付けるコンテンツをどう揃えるか、コンテンツを呼び込むためには何が必要か。人が増えれば、その後飲食店や賑わいというものは連動して次々生まれてくるものではないか。

劇場は一度整備してしまうと、簡単には姿を変えることができない。50年、100年と使うことになる。今ここでビジョンを検討した結果が京都会館再整備にどのように反映されるのかということに非常に心配している。

### ○村井委員

現在、京都市美術館長として、日々、地域を目にしているため、なかなか現実から離れた意見が出てこない。例えば岡崎地域の10年後の姿を考えた場合、岡崎グラウンドや平安神宮の一部に新たな空間がないこともないが、大半は、今の建物がそのまま残った姿ではないか。こうした岡崎地域をどのように活性化することができるかと考えたとき、平安神宮から大鳥居、更には三条通りまで至る神宮道を「広場化」していくという発想が鍵ではないか。

それから、これは岡崎地域活性化懇談会の中でも申し上げたことだが、みやこめっせの地下にある京都伝統産業ふれあい館という「宝」が外に知られていない、有効活用されていない。それを活かすためにも、京都会館を再整備する際、京都会館とみやこめっせの地下をつなげることができないか。これが私の長年の夢である。伝統産業ふれあい館のあの伝統工芸の世界を、もっと多くの人々が容易に触れることができるような、そうした工夫ができないものか。

京都市美術館と近代美術館を地下道でつないだらという意見はよく聞くが、京都会館とみやこめっせの間を地下でつなぐ、というアイデアが双方の機能活性化にも良いのではないかと考えている。

### ○本多委員

前は、変わらないことが平安神宮の役割だという話をした。文化財としての平安神宮は変わってはいけないと思うが、文化財の活用については、もっと色々な形があって良い。平安神宮でも展示、コンサート、学生祭典など様々な催しが奉納行事として行われている。

先ほど「京都人は宣伝が下手だ」、「京都人は宣伝するのが嫌いだ」との意見があった。神社はもっと宣伝が嫌い、苦手である。神社の機能を外向けになかなか宣伝をしないが、奉納行事は昔から神社の持つ機能であり、どのようなことでも奉納できる。どんな内容のものはダメとか、失礼などということはなく、地域やそれぞれの団体の方々が積み上げてきた大事なものであれば奉納できる。神社には、そうした機能がある。

また、MICE戦略という部分では、平安神宮の庭園と平安神宮会館は今までかなり貢献してきた。平安神宮会館でレセプションをやり、庭園を巡るという形式でかなりの国際会議が開催されている。神社には迎賓館的な機能も持っており、奉納と含め、色々な活用策は考えられるのではないか。

### ○門内委員長

平安神宮自体が「言挙げ（ことあげ）」、宣伝をしなくても、奉納行事をされる他の団体が

宣伝することは構わないということか。

#### ○本多委員

そのとおりである。文化財としてハード面は維持しないといけないが、それには莫大な費用が掛かる。そのための活用方法などを皆さんでお考えいただき、協力いただけたらと思う。

#### ○門内委員長

ありがとうございました。いずれにしろ、京都には、「文化・芸術」にしても、「科学・技術」にしても、本物を目指す志向があるので、変わってはいけない本質的な部分と、変わっていく部分とをどのようにうまく切り分けていくのかということが重要である。

文化・芸術に加え、「自然・環境」の話題もあるかと思う。

#### ○中嶋委員

岡崎地域には様々なポテンシャルがあるということは既に分かっている。そのポテンシャルをどう売るかという戦略が重要なのだろう。京都市のコンセプト案として「水と緑とハレ舞台」との叩き台があるが、十分表現しきれていない。岡崎地域を売り込むために、まず特化した地域イメージ、ブランドをつくる必要がある。

岡崎地域でブランドになるとすれば、やはり「文化」、「歴史」、そして「環境」、この3つであろう。それをうまくつなげ岡崎を連想させるようなキャッチコピー、コンセプトを立て、それに対して機能向上や情報発信など様々な戦略を検討する必要がある。

「ふさわしい施設は何か」という議論があるが、まず、現在の多くの地域ポテンシャルをどのように活かすかを考え、その上で足りないものは、どのような施設・機能かという考え方が必要だろう。岡崎を一言で表す言葉、キャッチコピーはなかなかないが、まず、これをみんなで共有することが一番大事なのではないか。

「岡崎らしさ」の一つとして、やはり自然環境に非常に近いということがある。この「岡崎らしさ」である自然環境をビジョンの中でどのように建設的に考えていけるかということも重要である。

また、文化財の関係では、琵琶湖疏水を中心とする近代化遺産、それ以前の地域資源もたくさんあるが、私の目から見ると「あるそのままだ」という気がする。それらをうまく活用しながら保存していくことが必要である。まず、こうした近代化遺産、文化財があることをアピールしていく必要があると感じている。

#### ○門内委員長

ありがとうございました。文化、歴史、環境という、岡崎地域が持っているポテンシャルがブランドにつながるよう、上手なキャッチコピーを工夫する必要がある。一言で言い表せないで、今のところ「岡崎スタイル」と書いているが、「岡崎スタイル」の中身をもう少し具体化していく必要があるだろう。

#### ○南委員

観光という観点から述べたい。岡崎のポテンシャル、京都のポテンシャルは、日本国内、海外から見てもかなり高い。ただ、世界から人を集める力はあるが、受け皿が欠けているがゆえに来ることができない人がたくさんいる。日本の企業も京都には来ていない。グローバルな企

業も京都には来ることができない。それは、ニーズを満たす会議場がないからである。国際的なコンベンションの規模としては、約1万人が着席できる総会が開催できることが第一条件である。そして500人、1,000人規模の分科会、さらに50人、100人規模で10~20の専門委員会が数日間開催される。これが、国際的なコンベンションの一般的なスタイルである。

京都の場合、1万人規模の着席できる会場があるか、というと現状ではない。では今後、京都では、国際的なコンベンション、MICEとして、どれ位の規模の受け入れを目指すのかを考えなければいけない。この会場も、コンベンションの受け皿の一つであるが、しかしながら、グローバルなコンベンションの受け皿とはなりきれない。最低限3,000人、5,000人規模の会場がないと、京都には大企業、グローバル企業によるコンベンションは来ない、来られない。また、世界的レベルの一流ホテルの宿泊能力が、京都は絶対的に不足している。

MICEと宿泊能力の無さが、京都の観光的なポジションをどんどん低くしていつていることを、我々は認識しないとイケない。

今、来ている5,000万人の観光客はほとんどが個人客である。企業として投資し、大規模なコンベンションを開くという需要は、国内では東京、横浜、世界的には香港やシンガポールに全部奪われている。京都の文化は世界に訴求できるポテンシャルを秘めているが、世界からの受け皿をどうするか、京都の経済的な活性化の引き金にどのように結びつけるかということ京都自らが決めなくてはならない。

そのとき、先ほども話題になった岡崎グラウンドは、企業人として見れば、活用に再考の余地がある。京都会館の1,000名、2,000名という会場も、もちろん演劇、ミュージカル等に使われることも好ましいが、コンベンションとして使える機能を持っていれば、もっと人を呼べる。そのときに、分科会会場として、みやこめっせ、平安神宮、ここ国際交流会館が一体として利用できるような、そういう運営の仕組みがあれば更なる強みとなる。その仕組みを考えなければいけない。

様々な都市計画制限等もあるようだが、MICE需要を岡崎地域に呼び込むべく、そうした規制の緩和、突破策も考えなければいけない。

## ○門内委員長

MICE戦略の拠点としての役割、京都全体の中での岡崎の役割について貴重な御提案をいただいた。その場合も、岡崎地域に存在する様々な施設を連携して活用することが重要になるということだと思ふ。先ほどから、京都会館、あるいは岡崎グラウンドをどうするかという具体的な場所の問題が出されている。それぞれに、検討しなくてはならない課題である。

## ○藤井委員

他の委員の意見と重複するところもあるので、簡潔に述べたい。

議題をいただいて、私が考えてきたことは「岡崎ブランドの確立」、京都市の資料でも出ている「岡崎スタイル」、あるいは上村委員の御意見にもあった「京都、岡崎らしさ」という点に尽きる。一方、それが一体、何を意味しているのかという点が、多分、各委員の方ともぼんやりイメージはしているが具体的に表現しきれていない。中嶋委員の御意見のように、誰が見ても分かるようにシンボライズされていない。ただし、簡単に、例えばこうだと表現してしまうのではなく、まさに議論を深めていくべきところだと思っている。これは、企業でいえばブランディングという戦略、「岡崎ならではの」「岡崎らしさ」を創り出していく上で一番核にな



る重要な論点である。何をもって「岡崎らしさ」として打ち出していくのか、その打ち出し方をまず考えていくべきである。

大島委員の「どこまで尖らせていくか」という点に関しては、私としては、これ以上無理というところまで特化、尖らせるべきだと思っている。中途半端なものであれば、恐らく埋没するであろう。最初に濱崎委員が「世界に誇れる」という趣旨の発言をされたが、これは他のどの地域にもないことが、恐らく力を持っていくであろうということを象徴している。

ベネッセの直島は、非常に注目を集めている。追いかけるように、他の事例も出ているが、やはり二番手、三番手では注目度、着目点は格段に下がる。他にない素晴らしいものをどうやって岡崎に創っていくかという点を「岡崎らしさ」とあわせて考えていくべきである。

それと、自然環境という視点で、前回の森本委員の御意見が非常に印象的であった。自然環境に近い岡崎では、生物多様性の存続というテーマも探れるのではないかと考えていた。本日、森本委員は欠席されているが、そうした自然、環境というテーマも大切にしていきたい。

もう一つ、地域の一体化が必要であるとか、各施設がバラバラであるという意見が出されている。一つの考え方として思ったのだが、現在、岡崎公園ということで部分的に呼ばれているようだが、それとは別に地域全体を一つの「庭園」と考えて、全体を回遊できるような、そうした一体的な意識を創り出していければおもしろいのではないか。

というのも、先日、平安神宮の庭園を森本先生の御案内で拝見する機会があった。庭園内は結構な距離があったが、ずっと回遊しながら実に様々なものを、中には路面電車まで、順番に辿っていくことができる。その拡大版のコンセプトのようなものを岡崎全体で醸し出していければおもしろいのではないか。当然、今日、話題に出された道路の公園化という試みも必要になってくる。円山公園も確か植治の庭だったと思うが、あれをもう少し大きくしたような、岡崎にある様々なものがつながった、現在の技術も活用した「岡崎植治の庭」のようなものになったらおもしろいのではないか。

## ○太田委員

日々、神宮道商店街で岡崎地域を目の前にしているため、具体的な話になってしまうが、いろいろポテンシャルをつなげるという意味で、岡崎地域にコンシェルジュのような組織があれば良い。半日、一日をここで過ごしたいという方のために、お奨めコースや市民ボランティアによる観光ガイドなど、様々なサービス、コンテンツをコーディネートしてあげるような組織である。そういう組織、施設を岡崎地域の入り口に造れないか。神宮道商店街には空き店舗も何軒かあるが、そうしたスペースを活用し、岡崎地域の催しのチラシや情報が全て入手でき、様々なものを総合的にコーディネートしてあげる観光案内所的なものがあれば良いのではないか。

話は変わるが、本多委員の話題の中で「神社には奉納機能がある」という点があったが、栗田神社の剣鋒であっても平安神宮に奉納できるか。栗田神社から平安神宮へ至る途中で別の神社の氏子エリアが含まれているようだが。

## ○本多委員

途中の経路上での取り扱いについては判断できる立場にないが、平安神宮の中で奉納行事をされることは問題ない。可能である。

## ○門内委員長

ありがとうございます。地域には、様々な見えないエリアやネットワークがある。これからの岡崎を考える上で大事なポイントの一つである。

## ○柏原委員

御意見を伺っていて、ここ2、3年でできそうな身近なこと、10年ぐらいのスパンで考えることがあると感じた。しかし、さらに、それよりももっと長い視点、長期ビジョンでやっているとかならないことがあると感じた。村井委員から、10年先でも岡崎地域の建物は何も変わっていないかも知れないとの御意見があった。確かに10年先では変わらないかも知れないが、30年、50年で考えれば、変えることも可能ではないかと思っている。

やはり、この岡崎地域を世界に発信していくためには、長期的スパンで、とにかく大きな発想で考えていかないといけない。小さな発想では「世界の中の岡崎」にはなりえない。そういう点で、大きくとらまえて、小さく積み上げていくという形をとる必要がある。

小さな積み上げの例だが、先日も疏水を歩いていて感じたが、やはり疏水沿いを散策できるのは魅力の一つになる。疏水の埋め立ては難しいだろうが、栈橋方式等である程度の遊歩道を創る。また京都市美術館、京都国立近代美術館のオープンスペースを活用して、人々が集えるようにする。お金はあまりかけずに、できる取組からスタートして、そして、岡崎の賑わい創出を担いながら、収益も上げられるような民間事業者の集まりを創っていく必要がある。その一つの策が、栈橋方式で疏水の上に遊歩道を創る案である。

そして、平安神宮から大鳥居までの間の神宮道、あるいは二条通など、非常に広い道路があるが、空間として少々もったいない。歩道を広げ、水や緑をもっと増やし森のゾーンを創り、そこにカフェを開くなど、美術館を訪れ、あるいは平安神宮でお参りをし、京都会館へ来た人たちが皆がそこで憩え、やすらぎを得られるようなゾーンとする。これも比較的早く、しかも大きくお金を掛けずにできるのではないか。そうして、まず人を呼び集めることから始めていくことで、岡崎地域をもっと素晴らしい場所にしようという、市民コンセンサスも創出できるのではないかと思う。

すぐに着手できること「人を集めること」をまず考える。そして、岡崎グラウンドの問題や京都会館再整備は、10年ぐらいのスパンで考える。さらに、もう少し長期的には、世界に通じるような文化施設を造れたらと考えている。

## ○西村委員

中嶋委員からは「まず現在の多くの地域資源をうまく活用する必要がある」という御意見や、ただ今の柏原委員からは「2、3年でできることと、中長期のことを区別し、まず今あるものを活かすべし」との御意見を伺った。ともに、岡崎の将来ビジョンを考える上で非常に大切なことである。

今あるものを活かすという点で、関連するのが文化財である。岡崎地域にある大規模な邸宅、庭園について、現在、調査をしている。課題を放置しておくとは大半はなくなってしまうかも知れない。有効な活用をしながら残していく必要がある。ちょうどこちらの席から、東山の美しい景色が見えているが、庭園群がなくなると、この美しい景色、岡崎らしさが失われてしまう。

先ほど南委員から提案のあったMICE戦略の受け皿として、京都らしい「和のパーティ」会場や、前回高木副委員長から発言があったラグジュアリー層の宿泊の受け皿とするなど、様々な庭園の活用が考えられる。

もう1点は、新たな賑わいの創出である。この岡崎地域に求められる、新しい目玉になるようなコンテンツを発信する施設の誘致も必要だと思うが、一方で、岡崎地域に滞留する機能、各施設を訪れた方々が前後の時間を有効に過ごせる、憩える、そうした空間も必要である。

「夜の岡崎の在り方を考えたい」との意見を前回述べたが、夜に加えて、朝、早朝も考える必要がある。夜とともに早朝も岡崎地域はすごく気持ちの良い場所である。夜と早朝に滞留できるような場所、機会が岡崎地域には欲しい。

岡崎地域を訪れた人は、カフェやレストラン、ショッピングなど魅力的な空間・機能を求めている。京都市の施設、民間の施設を含め、それぞれの施設改修や機能強化に合わせ、そうした空間・機能を新たに付加するような活用ができないか。

## ○高木副委員長

皆さんの御意見を聞き、全体的に感じたことを述べたい。

「将来ビジョンで何を指すか」という論点は、少しずつ違った点はあるが、いずれにしろ、岡崎の地域アイデンティティが何かということをしっかり議論する必要がある。

本多委員が平安神宮について「ハード面は変わらず、将来へ継承したい」と発言された。確かにそのとおりだが、一方で、平安神宮が創建されたのは、建都1100年記念祭のときである。その時に新しく建てられた平安神宮が、百十数年経ち、変わってはならない存在になった。その点がやはり鍵である。建都1200年記念としては、京都全体であまり大きなことはできなかった。今、こうして、岡崎地域のビジョンを考えている。その時、建都1200年でやり残したこと、または建都1300年でやるべきことを描く、というぐらいの心構えが必要ではないか。平安神宮のような何か、をこの岡崎地域に残していけるかという重大な任務を私たちが持っている、と感じた。

「岡崎地域の機能・役割」、「ふさわしい賑わい施設」についても、想定できる用地は現実問題として少ない。考えられるのは、京都会館をどのように再整備するか、岡崎グラウンドが岡崎地域にどうしても必要か、ということであろう。個人的には、現在の岡崎グラウンドが岡崎地域になければならないものとは思えない。軟式野球の需要と市内全体のグラウンドの利用状況などを検討すれば答えは出るのではないか。

それと、岡崎グラウンドの西側の道路（神宮道）だろう。自動車が通らないようするのなら、京都会館と岡崎グラウンドの間をつなぐスペースとして、特区制度等も活用し、新たな在り方・活用方策を考えるべきである。

それ以外は、岡崎地域には既に様々な資源があるので、今ある資源をどのようにつなぎ、活かすかということが重要な課題である。どのような地域を目指し、この地域にある官民の各施設が、共通の目的に向かって決意し、一体的に運営・進行していけるか。4点目の論点であるエリアマネジメント、地域プロデュースが大半の鍵を握っている。

少々余談ではあるが、岡崎地域周辺には植治の庭をはじめ、庭園群がたくさんある。その庭園の隣に、風営法の届け出が必要なホテルがいくつか建っている。この界限は以前からそうしたホテルがあったが、経営がきびしくなったのか、最近では随分マンションに変わっている。

そうした用途転換の機会を上手くとらえれば、民間の手によって小規模だが良質な観光ホテルに生まれ変わることも可能である。岡崎地域内で売買したいという物件が出れば、その土地建物の信託を受けて、好ましい用途転換を行い、信託をした所有者には利益還元するという方法も想定できる。そうした視点も含めて、かなりしっかりとした活動を展開できるエリアマネジメント組織の方向を考えるべきではないか。

## ○上村委員

先ほどから植治の庭の話題が出ているが、現状では、一般に来た人が入れる庭園はごくわずかである。

また、西村委員から「岡崎地域には早朝の美しさもある」との発言があった。成功事例として出された直島では、杉本博司さんによる朝日が差し込む護王神社のガラス階段の現代アートが有名である。あれは直島に「宿泊」しないと楽しめないコンテンツである。京都に観光で来られる人も、繁華街や駅前に泊まるのではなく、岡崎で宿泊してもらおうようにしてはどうか。岡崎のゆったりとした文化の雰囲気、朝の美しさを、宿泊するからこそ楽しめる、そういうアイデアもあるかと思う。直島では、地域に住む住民たちが案内をしてくれ、また、各家での「のれん展示」など住民たちがアート活動に参加している。だから、直島は一回行っただけでは終わりにはならず、リピーターを産み出している。

## ○門内委員長

エリアマネジメント、地域プロデュースの話が出てきた。特区制度を活用するにしても、最終的には、エリアを決めたときに、どういう主体が形成され、どのように運営されていくかということが鍵を握っている。政府の新成長戦略の中でも、あるいは世界の様々な特区事例の中でも、注目を集めているのは「PPP（パブリック・プライベート・パートナーシップ）」と呼ばれる官民連携の仕組みである。PPPにおいては、プライベートセクターとパブリックセクターに加えて、地域のコミュニティセクターがある。これらの3者をどうつないでいくかが鍵を握っている。先ほどの瀬戸内芸術祭にしても、やはり、それらを動かしているプロデューサーがいる。越後妻有のプロジェクトにしても、外からも様々な人が入り込んで動いている。エリアマネジメント、地域プロデュースの仕組みについては、やはり主体形成の問題が大変重要である。今後、是非検討していきたい。

ここで、欠席されている委員からの御意見を紹介いただきたい。

（欠席委員からの意見・提案紹介）

——（説明 事務局 総合企画局市民協働政策推進室岡崎地域活性化担当部長 奥）——

## ○門内委員長

ありがとうございました。

抜けていた論点も補っていただいた。また、先ほど議論のあったエリアマネジメントにおける主体の問題も含まれていた。

街路の広場化については、日本ではあまり事例がないが、ヨーロッパでは、ヘルシンキのエスプラナーデのように1キロ位続く広い街路があり、そこにいれば1日様々なことが楽しめる空間が実現されている。岡崎地域でも来訪者が憩い、滞留できるような良い空間を創出することは大変大事である。

御意見をお聞きしていて、活性化というのは何なのだろうか、やはり人が集まること、多くの優れた人々が集まってくれることが鍵を握っている、と感じた。

集まる人としては、観光客、地元・京都の方、南委員からもご指摘のあった「企業」などに所属する会議参加者など、様々な属性が想定される。どのような人を集め、どのようなことをやるのかという点、その原点のところをしっかりと考えたい。

また、柏原委員の御意見である「細かいことを積み上げながらも、全体として大きなビジョ

ンをしっかり打ち出していく」という点。なかなか下から積み上げての合意は難しいが、全体として思い切ったビジョンを出し、それを実現するために今これをしなければならないという形で、全体から今やるべき具体的なことへ戻ってくる考え方、これも重要である。

今、ヨーロッパでは「フューチャー（未来）センター」と呼ばれる施設が注目を集めている。NPOや、様々な属性の人が集まり、中長期的な未来をどうするのかという議論をする創造的な協働の場である。やはり我々は、岡崎の未来ビジョンをしっかり見据え、そこから今、必要なことは何かという議論をしたい。

小さな積み上げも大事だが、やはり大きなビジョンを間違えないで、しっかりと打ち出していく必要がある。その中で今ある、今できる短期的なこと、中長期的なことをうまく組み合わせていくことが大事である。

その前提として、岡崎地域にどのような資源があるのかをしっかりと見ること。琵琶湖疏水、自然環境含め、実に様々な資源があるが、豊富な資源がバラバラにならないよう、しっかりビジョンで取りまとめていきたい。

そして、つなぐということ。ソフトも、ハードも、人や組織のつながりも含めて、ネットワーク、つなぐということをやらないといけない。

## ○大島委員

エリアマネジメントを考えると、主体論はとても大事なことで、各主体の役割分担を含めて検討していくことが大事である。

また、あと1点、加味しておかないといけない点がアクセスの問題である。魅力的な地域であれば、直島のようにフェリーに乗ってでも行くということになるかもしれないが、やはり岡崎地域というのは鴨川を挟んでいるとはいえ、京都の他の魅力的なエリアとどのようにつないでいくかということが大事である。

私がゼスト御池地下街の活性化に関わった際の経験だが、人というのは突然湧いてくるわけではなくて、やはり地上とのつながりで人がやって来る。そうした点も意識してアクセスをデザインしないと、魅力的な取組をしてもなかなか人は来てくれない。

## ○門内委員長

アクセス、モビリティの問題も非常に重要である。岡崎に来るまでのアクセス、岡崎地域内のモビリティがあるが、地下鉄の利用やEV（電気自動車）なども議論の射程に入るだろう。

他にも、当然考えるべき事柄であるために、テーマとして浮かび上がっていない話題はある。例えば「ユニバーサルデザイン」、先ほどから断片的には出ている「景観都市」。あるいは、全てのテーマを包含するような「観光」という問題。観光と言っても、狭い意味の観光ではなくて、京都を深く学ぶことができるような新しいタイプの観光や、先ほどから南委員も指摘されているMICEなどもある。また、当然の課題として「環境」の問題がある。そうしたテーマも検討していかななくてはならない。

ここで、次の議題である「作業部会の設置」について、説明させていただく。

### （5）作業部会の設置

## ○門内委員長

特に資料は用意していないので、私から説明させていただく。

前回の委員会で、作業部会の人選は、私から推選し、個別にお願いする、ということで御了解いただいていた。既に個別に打診させていただいているが、作業部会メンバーには、高木副委員長、大島委員、濱崎委員、藤井委員を推選させていただく。なお、検討委員会の委員長として、議論の流れを見ておかないといけないので、私も作業部会メンバーとして参加させていただく。作業部会長には、岡崎地域をよく御存じの高木副委員長にお願いをしたい。

当検討委員会からの5名に、今日もオブザーバとしてたくさん同席いただいている京都市プロジェクトチームのメンバーを加え、ビジョン素案づくりを行う。また、作業部会で検討するテーマについて造詣の深い委員の方々も参加いただいて御意見を伺う機会を創っていききたい。作業部会メンバー以外の委員も関係がなくなったわけでは決していない。様々な形でコミュニケーションをしながら進めていきたいので、積極的な御協力をお願いする。

もう少し、時間があるようなので、御意見があれば伺いたい。

### ○中西委員

今日の委員会で、岡崎公園の中に、みやこめっせや京都国立近代美術館が入っていないことを初めて知り、驚いている。都市公園法の関係があるとのことだが、第1回委員会で話題に出た上野公園（東京）や天王寺公園（大阪）は、大きな庭園や美術館も全て公園の中に入っていて、地域の呼び方、地域イメージも非常に分かりやすい。

岡崎地域では、事情があり検討委員会でも「岡崎公園」ではなく「岡崎地域」という呼び方をしているのだと理解したが、今後、活性化に向けて取組を進めるにあたり、海外、国内に地域イメージを分かりやすく訴えられるようなキャッチフレーズ、ニックネームのようなものがあると良いなと感じた。

### ○高木副委員長

意見というよりお願いである。作業部会で、全てのことが取りまとめられきれないテーマも出てくる。引き続き、他の委員の方のお力もお借りすることになるのでよろしくお願いする。

それから、特に柏原委員と南委員にお願いをしたいのだが、岡崎地域のエリアマネジメント組織を創るとき、やはり産業界の方々の果たす役割に非常に大きな期待を寄せざるを得ない。できたら、商工会議所等でも、岡崎地域活性化について話題にし、御意見をお寄せいただきたい。特に、先ほどから植治の庭が話題に出ているが、大半の庭園を全国規模の大手企業が所有されている。庭園の活用には、そうした大企業の協力がなければやっていけないことも多い。是非そうした大企業、産業界の方々にご協力いただけるよう、よろしくお願いしたい。

### ○門内委員長

大事なことをお伝えいただき、ありがとうございます。是非皆さん方一緒になってやっていただくようお願いしたい。

今後、作業部会でビジョン素案づくりを進めるが、高木副委員長から話があったように、他のメンバーともコミュニケーションをとりつつまとめていきたい。

第3回の委員会は、12月上旬ごろの開催を予定している。本日は、長時間に渡り、貴重な御意見をいただき御礼申し上げる。

## 4 閉会

以上